



第19回
たかさき薪能

たかさき
薪能

第19回 たかさき薪能

日時／平成16年10月10日(日) 午後4時30分開場・午後6時開演

会場／城址公園庁舎前広場(高崎市役所前)(雨天の場合：群馬音楽センター)

主催／高崎市・社高崎観光協会 後援／高崎商工会議所

17:30 演目解説(20分)

吉永 哲郎

17:50 休憩(10分)

18:00 あいさつ・火入れの儀(15分)

18:15 仕舞(観世流)(15分)

「屋 島」 藤波 重彦

「松 風」 岡 久廣

「船弁慶」 浅見 重好

地誌

金子 聡哉

小松山浩二

藤波 重孝

北浪 貴裕

新江 和人

演目解説

高崎経済大学非常勤講師 吉永 哲郎

能

「融」

とれる

歳を重ねることに、月を眺め故人をしのぶことが多くなっています。この「融」という能は、「や、月こそ出でて候へ」「げにげに月の出でて候ぞ」と謡われま

すように、「月」が重要な役割を持ち、前後二つの場面に分けられた能です。前半は、都の六条河原の院に足を留めた旅の僧が、塩汲みの老人と出会います。老人は、陸奥塩釜の景色を模した河原院

狂言

「口真似」

くちまね

よいお酒が手に入った時、だれか気の合う人と一献傾けたいと思うものです。太郎冠者は仕えるお人から、「よい酒をもらふてござるが、誰そ心安いお方とたべたうござる」といわれ、「私と呑ませられい」といったところ、「汝と呑うで何の面白い事が有る物じゃ」といわれ、「大の酔狂人」を連れてきます。主は気にいらす断りたいのですが、太郎冠者の言

18:30 狂言(和泉流)(20分)

「口真似」

シテ(太郎冠者) 野村 萬斎

アト(主) 竹山 悠樹
アト(酔狂人) 深田 博治

18:50 休憩(15分)

19:05 能(観世流)(60分)

「融」

前シテ(汐汲の老人) 川原 恵三
後シテ(融大臣) 下平 克宏大鼓 安福 光雄 太鼓 小寺真佐人
小鼓 観世新九郎 笛 田中 義和ワキ(旅僧) 村瀬 純
間狂言(所の人) 高野 和憲後見 藤波 重彦
岡 久廣地謡 小松山浩二 大松 洋一
北波 貴裕 浅見 重好
藤波 重孝 松木 千俊

20:05 終演



のを嘆き、うらさびしい月光をたよりに、融の大臣が河原の院ですごした遊樂の日々を語ります。後半は、この老人は融の大臣であると教えられた旅の僧が、夢での再会を期待してまどろみます。やがて、大臣の亡霊が現れ、月光の中で、昔を偲びながらさまざま華やかな遊樂を尽くし、やがて夜明けとともに、融の大臣の亡霊は月の光の中に消えていきます。

をさせて客を断わろうとします。この口真似としぐさのおもしろさが、この狂言の核心。口真似には、他者へのつくろいの思いがあり、思わぬことによって、そのつくろいがほころび、大失態を招くものです。狂言の笑いのかけから「主体的に真実に生きよ」とささやかれているようで、はっとさせられます。